

イラストレイテッド ミニマム創 内視鏡下泌尿器手術

木原和徳 著

＜書評者＞ 荒井陽一（東北大学大学院医学系研究科教授・泌尿器科学分野）

1990年代、腹腔鏡手術が本格的に導入され、現在は体表手術を除くほとんどすべてが腹腔鏡下に施行可能な時代になった。腹腔鏡手術がなぜこれほどまでに普及、発展したのか？ それは開放手術の欠点である侵襲性の問題に劇的な革命をもたらしたからである。そして、創の大きさは侵襲そのもののなのだということが誰の目にも明らかとなった。一方、東京医科歯科大学の木原和徳教授は従来の開放手術を基本として、侵襲そのものである創を最小化させる新しい方向性を呈示してきた。今回刊行された本書はその長年の成果の集大成とも呼ぶべきものである。

2002年に著者は『ミニマム創内視鏡下泌尿器手術』を刊行し、本術式の基本概念とその応用手技を明らかにされている。本術式の最大の特徴は開放手術にこの内視鏡を取り入れたことにある。予想される窮屈な操作野の欠点が、内視鏡と独自に考案した器具によってみごとに補われている。モニターによる術野の共有は、手術の客観性と再現性を実現し、結果として

著しい教育的効果をももたらした。本書『イラストレイテッド ミニマム創内視鏡下泌尿器手術』では、その後の膨大な症例蓄積をもとにさらに大きな飛躍を遂げている。泌尿器科の全手術を著者のコンセプトのもとで、1つの手術体系として完成の域にまで達せしめたものといえよう。

本書の最大の特徴はそのタイトル通り、手術の説明に写真ではなくイラストを用いた点にある。しかもそのすべてが著者オリジナルのイラストである。これは大変なことである。手術が首尾よく完遂されるためには、解剖が理解され、そのイメージにしたがって術野が展開されることが必須である。だから優れた術者ほど頭の中に独自の術野イラストを描いているはずである。各自の頭の中に描いたイラストの精緻さが手術の成否を決めるといっても過言ではない。すべての操作がイラスト化されれば、筆者の中ですべての手術が一定の体系化をとげたことを意味する。もちろん、このような精緻なイラストを可能にしたのが内視鏡

の導入であることはいうまでもない。

本書を一覧して、評者は長く座右の手術書としてきた John Blandy 教授の“Operative Urology” [“Blandys Operative Urology” Blackwell Pub, 2008 (3rd ed)] が思い浮かんだ。Blandy 教授の手術書もすべて彼自身のイラストが用いられている。そのイラストは決して優雅なタッチで描かれているわけではない。しかし手術のツボを余すところなく伝えて今なお味わい深い。ご自分の手術イメージのすべてを本書にぶつけられた木原教授の熱意とエネルギーにあらためて敬意を表したい。

2003年には木原教授の主導の下、ミニマム創内視鏡下泌尿器手術研究会が設立された。2006年に本術式は先進医療の認定を受け、学会および社会の認知度は格段に高くなっている。本書には確かな経験に基づくヒントがイラストとともにぎっしり詰まっている。オープンサーजनだけでなく、ラパロスコピストもぜひ手にとって一読することをお勧めしたい。

●A4 頁 152 2007 年
定価 14,700 円
(本体 14,000 円+税 5%)
[ISBN978-4-260-00481-7]
医学書院 刊